

人類を進化させた 食と農の向かう先

奥 和登 × 山極 壽一

農林中央金庫代表理事 理事長

総合地球環境学研究所 所長

Kazuto Oku

Juichi Yamagiwa

奥和登[おく・かずと]
1959年大分県出身。東京大学農学部卒、農林中央金庫入庫。2011年常務理事、17年代表理事専務を経て18年より現職。

山極壽一[やまぎわ・じゅいち]
1952年東京都出身。京都大学理学部卒。1987年京都大学理学博士号取得。京大霊長類研究所助手、同大学院教授などを経て、2014年京大総長に。21年より現職。

サルや類人猿とヒトとを分かつのは、何を食べるか、どう食べるかだ。
では、食が大きく変化しているなか、人類はどう変わっていくのか。
日本を代表する霊長類研究者として、京都大学前総長として、幅広い分野について
分析・提言を続ける山極壽一さんと、農林中央金庫理事長の奥和登が、
食と農の歴史と未来、ヒトの暮らしと地球のいのちについて、
京都の総合地球環境学研究所で語り合った。

奥 私たち農林中央金庫は第一次産業を基盤とする金融機関であり、日本の農林水産業を支えていくことを使命としています。農林水産業はまず重要な基幹産業であるというだけでなく、食や地域、文化、環境などとも密接に関連しているわけで、山極さんの研究分野と重なるところがたくさんある。京都までお邪魔してお目にかかれるのを大変楽しみにしていました。

山極 ありがとうございます。食というのは命をつなぐために欠かせない重要な要素ですし、一方で、おっしゃるとおり、人間の文化においても大きな意味を持っていて、食を見ていくだけでも、人間とは何かという問いへの答えが相当わかるくらいです。

食べ物というのはサルにとっては喧嘩の元で、群れの誰かと、あるいは群れのみんなで顔を突き合わせて食べるなどということは一切ありません。でも、人間はわざわざ顔を突き合わせて食べるんですよ。サルとは真逆で、喧嘩の材料になるものをわざわざ間に置いて一緒に食べる。その前提になるのは、「あなたと私は仲がいい」ということです。

人間でも子供はそれがわからなくて最初は食べ物を奪い合いますよね。それが大人からしつけられて、喧嘩をせずに仲良く食べられるようになる。食というのは子供にとって最初の社会なんですね。サルでは喧嘩の材料だった食べ物が、人間ではつながり、絆の材料になる。

奥 となると、今コロナ禍でわれわれが食卓と一緒に囲みづらくなっていることは、コミュニケーション(共感)という点からすると、大きな課題を抱えているということですね? デジタル・リモートで単に情報を共有するだけでは本当の意味で繋がっているということにはならないと……。

山極 大変まずいことだと思っています。人間が最初に果たした食物革命というのは、食物を運んで、それをみんなで分け合って食べること。サルと違ってゴリラやチンパンジーといった類人猿は食物を群れの中で

分配しますけれど、要求されるまで分配はしない。また、食物を運ぶことはしないので、食物を誰かのところに持って行って「食べてね」というようなことはしません。これは、人間以外の霊長類はみんなそうです。

人間は食物を運ぶようになって、それが社会をつくる大きな道具になると気づいたから、狩猟採集生活に入ったわけです。遠くまで食べ物を集めにいって、それを分配して食べるということが、人間どうしを結びつける絆になっている。食事が特別の意味を持っているんです。

奥 とてもよくわかります。コロナ禍では特に仕事の面でコミュニケーションのうちの相当部分がリモートで可能だということがわかりましたが、コロナ後の時代に移行した際には、人と人が直接会う、できた食事をもにすることが特別な意味をもつということですね。

山極 そこは本当に大切だと思います。

狩猟採集から農耕牧畜への推移が 食の進化を急加速させた

奥 今のお話でも、人類の進化において、やはり食が大きな役割をいろいろと果たしてきたことがわかりました。食を支えているのが農林水産業ですので、「食と農はどうあるべきか」というのは私たち農林中金の核心的なテーマです。実際、食と農のバリューチェーンを対象とする食農ビジネスを事業の柱に育てていこうとしています。もちろん、さまざまな課題がありまして、試行錯誤をしながら取り組んでいるわけですが、

山極 食と農では今、われわれは確かに問題を抱えていますね。実はものを食べるわれわれの身体の方はまだ、農耕牧畜が始まる前のままで、機能としてはサルや類人猿とあまり変わらないんです。一方で食べ物の方は、1万2000年くらい前に狩猟採集から農耕牧畜への推移が始まってから急速に技術が発展して、今では食品工業が一大産業になっているし、農業も工業化

数値化が難しい目標にも取り組み続ける

しつとある。

この農業の工業化というのは農業のあり方を大きく変えるものです。狩猟採集も農耕牧畜も人と自然をつなぐ接点ですが、農業をやるのは人間だけ。人間が始めた最初の人間らしい文化であって、人間の身体も心もまだその中にあるんだと思いますが、科学技術による工業化で農業は自然から急速に離れています。

自然は、同じものは絶対つくりません。でも、農産物の規格が厳格になって、その規格に合ったものを大量につくって売ることが当たり前になると、農家さんがせっかく育てた野菜でも規格外ではなかなか売れず、廃棄されてしまうこともある。僕は京都市動物園の名誉園長をやっています、この動物園では今、近郊の農家さんに頼んで、廃棄する野菜を動物の餌としていただいています。

奥 食品廃棄は本当に大きな問題ですし、規格外の農水産物の活用は私たちも支援しているところですが、

まだ道半ばですね。

山極 僕はアフリカに40年以上毎年のように足を運んでいます、現地の農業を見ていると、それまで細々とつくってきた品種から、効率よく大量につくれる農産物へと切り替えて、それを輸出するから、自分たちの食料が不足して飢餓が蔓延している状況がある。農産物を大量生産して大量販売する世界的な分業体制に組み込まれているわけです。一方で日本では大量に食料が余って廃棄していて、廃棄量は海外で不足している食料の1.5倍くらいに達する。この現状をどうすればいいのか。輸入できるのが当たり前だと思っても、それこそロシアのウクライナ侵攻のようなことが起きれば、状況がガラリと変わるというリスクもあります。

奥 国内では価格の面で輸入品より不利だという理由で農作物が作られなくなり、耕作放棄地が増えて、農業の就業率も落ちています。同じことは水産業や林業でも起きています。こういう構造の中で、なんとか生産者の所得を上げられないか、そして農林水産業を担う人たちが守っている地域を維持できないか、つまりは第一次産業を、環境や食料安全保障などの面まで含めて持続可能なものにできないかというのが、重要なテーマです。そのために金融は何ができるか。

山極 処方箋はいくつかあると僕は思っています、ひとつはブランドをどうつくるかですね。日本列島には、実は世界規模で先端的になれる農業を生み出す素地がある。自然の多様性がまだ保持されていて、そこで育まれる地域の産物も多様ですが、これは農業だけでなく水産業でも同じです。世界農業遺産に日本では11地域も指定されていて、この数は世界で2番目に多く、土地ごとのいろいろな条件に応じて違う農業をやってきたことの現れです。これは日本の強みになっている。海外の画一的な大規模農業よりも、むしろ地域別の小規模な農業の方がブランドをつくれるかもしれません。

奥 そうですね。実際にそうした取組みで成果を挙げている地域も出てきていますので、これをもっと増やすお手伝いできればと考えています。その際、多様性がポイントになるというお話はなるほどなと思ってうかがっていました。一方、今日的にはダイバーシテ



均一性は脆弱性。多様性こそが……

いの必要性が議論されていますが、その有効性をどう説明したら説得力があるのか、なかなかうまく伝え方がなくて悩んでいるところもあります。

山極 それなら、反対に、均一性の脆弱性を伝えたらどうでしょう。山に杉だけを植えると他の植物が育たない真っ暗な森になって、生態系が壊れてしまう。それは人間社会でも同じで、多様性には許容力と包容力があるし、多様だからこそ新しいものが生まれるというのが僕の持論です。2001年のユネスコのパリ総会で「文化の多様性に関する世界宣言」が採択されていて、第7条に「イノベーションは文化によって成し遂げられるものであるが、複数の文化が接触し合うところで生まれるものである」とあります。文化がたくさんあって、それが接触し、刺激しあうことによって未来が生まれるし、実際、人類もそうやって進化してきました。

奥 なるほど。ありがとうございます。

山極 面白いことに、SDGsの17あるゴールでは文化について直接は触れられていません。多様性のようなテーマでは文化を考えることが不可欠なのに言及がないのは、文化は非常に重要であるにもかかわらず、言語化することが難しいからです。

奥 価値を表現できないジレンマというのは、私たちも農林中金のパーパスの策定などで痛感しています。私たちの目指す目的の中には、地域の活性化など、数値目標が立てにくく、達成度の評価が難しいものもある。ただ、言語化や数値化の難しさに悩みながらも達成への取組みを続けることこそが大切なんだと、今あらためて感じています。

農林水産業の成長の鍵は 地域ごとの多様性の維持

山極 農林水産業へのもうひとつの処方箋は、希少な農水産物をブランド化したうえで、さらに付加価値を付けることです。京都に外国から来る観光客は20年前なら京都市内の神社仏閣を回っていたわけですが、コロナ前のインバウンドでは舞鶴などの日本海沿いにたくさん行くようになっていました。そこで何をするかと言えば、カニを食べる。

奥 やっぱカニですか。



山極 そうです。そのカニが人気だからといっても、輸出するのではなく、産地まで食べに来てもらう。そうすれば、乱獲で資源が枯渇することもないし、水産業だけではなく観光でも稼ぐことができるようになるわけです。農業だけでなく他の産業とも連携することを考える。

奥 まったくそのとおりだと思います。今のお話のように、地域の文化や地域の空気を価格に上乗せしたうえで食べていただけることで、初めて日本の農林水産業には競争力がついて生産性が上がるという気がしますね。

もちろん輸出にも私たちはものすごく力を入れているわけですが、その輸出をテコにして観光などに結びつけたいとも考えています。「こんなにおいしいものが日本にはあるんですよ」ということを、輸出を通じ

地域ごとの小規模農業だからこそその力も

て海外の消費者に味見して知っていただいて、「だったら日本に行ってみよう」と産地まで来てもらう。モノ消費からコト消費への変化もありますから、コロナ禍の後、海外の方も日本に来られるようになれば相当期待ができるんじゃないかと考えています。

地域ごとの特産品や観光を盛り立てることに加え、複数の地域を巡って楽しんでもらえるように商品化ができればさらにいいと思います。私は出身が大分県ですが、大分はまさに農林水産業の産品や観光の拠点などが地域ごとに多様にある県。県全体で食や観光の目玉を共有してシナジーを上げられるような取組みができないかと思っています。

山極 大分には先日、私も講演で行ってきましたが、そういう可能性が大にある県ですね。

奥 温泉と食事と宿泊を1か所ではなく県内の複数の地域で分担できるような、拡大版・日本のアルベルゴ・ディフーズ^[注]が大分で実現できたらベストだと思っています。

[注] アルベルゴ・ディフーズとは「分散したホテル」を意味するイタリア語。地域の各所にある宿泊拠点や飲食店が宿泊や飲食といった機能を分担し、地域全体をホテルとして機能させることを指す。宿泊の面では、改修した空き家なども活用される。

日本の農業はサービス過剰 生産者と消費者に新たな接点を

山極 処方箋の3つ目は、「最高のサービスは、サービスをしないこと」ですね。いい例はお鮎屋さんです。店に入ってカウンターに座ると、「何にしましょう？」と尋ねてくる。「今日のお勧めはこれですよ」でもなければ、「なんでもお好きにどうぞ」でもなく、むしろ客に鮎の食べ方という教養を求めてくる。でも、それがまた楽しいわけですよ。

農林水産業で言えば、大量生産をすとか旬以外にも出荷できるようにすとか規格に合った産品だけを販売すとか、こういうのは今の生産者や消費者には常識になっていますが、僕に言わせればサービス過剰。その常識を一度、疑ってみた方がいい。

奥 サービス過剰ですか。なるほど。

山極 はい。農水産物というのは元々、市場の^{あいたい}相対取引で売り買われていたものなんです。消費者が市場に行って、産品を並べている生産者と交渉しながら、これは大きいとか小さいとか、これはどうやって育て

たのかとか、どう料理すればおいしいのかとか、コミュニケーションしながら買っていたわけですよ。これが消費者と生産者がお互いに信頼しあう原点なんですよ。

そういうコミュニケーションなしに、今の消費者はお店に並んでいる同じ規格のものを同じ値段で、話のできる相手が目の前にいない状態で買っている。それは本来の農業のあり方ではないと僕は思います。生産者の側も、自分がつくったものを本当に信用して、おいしい、うれしいと思ってくれる人に売りたいし、自分がどれだけ努力をしてどれだけ愛情を注いできたのか、それを説明したうえで買ってほしいわけですよ。

いつでも同じものを黙って買えるという過剰サービスはやめて、原点に立ち返る。そういう取組みが必要じゃないですかね。実際、僕は農家さんや漁師さんに毎月いくらか“投資”をして、直接、野菜や魚を届けてもらっています。

奥 最近では東京の方でもマンションの1階に「私がつくった作物です」といって月2回売りに来てくれる生産者の方がいたりしますね。生産者と消費者のつながりということでは、スーパーなどでもトレーサビリティの観点もあって「この商品は私がつくりました」という表示を出しているところが増えてきています。

山極 僕の“投資”も、何が届かわからないという、それこそ過剰サービスのない状態なんです。蓋を開けてみたら立派なタイが入っていたり、レシピなどを紹介する手紙が入っていたりすると本当に嬉しい。

奥 常識を疑ってみよという今のお話と関連しますが、人類の進化は弱みを強みに変える戦略だったというのが山極さんのお考えですよ。

山極 ええ。つい最近まではそうだったんですよ。ところがこの100年、強みを拡大する方向に変わってしまっ、僕はそれが間違いだと思っているんです。強みを強化していったら拡大路線しかなくなって行き詰まりますから。人間はずっと昔から強みの強化をやってきたというのは勘違いで、弱みを強みに変えながら、持続的な世界をなんとか構築しようとしてきたのが人類の進化史であり文明史だったわけです。

奥 日本の農林水産業でも、弱みを強みに変えることで持続可能な農林水産業が実現できないかという考え

人口減少もチャンスになりうる

方ですね。地域ごとの小規模農業だからこそブランド化できるというお話もそのひとつでしたね。

山極 林業でも同じようなことが言えますね。戦後すぐに植林した分がもう樹齢70年、80年に達して大径木化しているのに、これまでは価格などの面から売りにくいということで伐採が進まなかった。ところが今、コンクリート建築の多くが100年もたないことがわかってきて木造建築が見直され、木造の大規模建築も可能になってきています。ここをうまく結びつけば、新しいマーケットが生まれて伐採が進み、その後若い木を植えれば森の二酸化炭素吸収量も増えて、地球環境の保全にまでつながる。発想の転換によって弱みが強みに変わるわけです。

奥 林業にも、地球環境の保全という風がやっと吹いてきたと感じています。

強みを拡大する進化から 弱みを強みに変える進化へ

山極 協同組織というのも見直されていますよね。銀行の統合が続いていますが、規制によって地域に結び付けられて広域合併が難しい信用金庫や信用組合の中に今、地域を足で回れることが強みになっているところが出てきている。逆に、“大合併”した銀行には、大きな組織であることの弱みも見えています。

奥 J AやJ F、J Forestはもちろん、連合会や全国連の一員である農林中金も同じ協同組織で、やはり地域に根づいています。もちろん国内では少子高齢化による人口減少などで疲弊している地域もありますが、私たちは地域に根ざしていることに大きな意義を感じており、地域の活性化にも注力しています。

山極 人口減少はチャンスだと思いますよ。僕は過疎社会の方が生きやすいと考えているくらいです。少子高齢化で老人ばかりの過疎になれば、老人が老人の生活リズムで暮らせるようになる。電車に乗ってモタモタしても嫌がられず、ゆったりと自然の流れののって自分のリズムで生活できる。こんなに豊かな話はありません。

奥 なるほど。今は技術のサポートも進んでいますから、かつての過疎とは違いますね。

山極 ええ。たとえばドローンが薬を届けてくれると

か5Gで遠隔診療が受けられるとかになれば、人混みの中を街の病院まで出ていなくていいわけですから。

過疎の地で老人が農業をやることも、決して弱みではありません。そもそも人類が狩猟採集から農耕牧畜に移行したのはなぜかといえば、狩猟では弓の名人などエキスパートが力を持つのに対して、農耕は技術さえわかれば老若男女、誰でもできるんですね。みんなが参加できるのが農業で、みんなが一緒になって働けるからこそ定着した。歳をとってもできるのが農業なんです。高齢者の農業を助けるIT化もどんどん進めるといいと思いますね。

奥 はい。私たちもアグベンチャーラボの取組みを通じて、農林水産業や地域のかかえる社会課題をテクノロジーで解決しようというベンチャー企業への出資を進めています。面白い技術がいろいろ集まっていますよ。

今日は元気や勇気の出てるお話をいただき、ありがとうございました。

山極 こちらこそ、ありがとうございました。

